

## Newsletter

December 2004

<http://www.aack.or.jp>

## 目次

梅里再訪

松林 公蔵

AACK人物抄

宮崎武夫さん(一九〇五～一九四五)

平井 一正

フォスコ・マライニさん、ありがとう

本多 勝一

妙高の雪

横山宏太郎

五月連休にヒュッテからワンデイで楽しめる山スキーコース(その一)

高尾 文雄

アムネマチンと黄河源流を訪ねて

中島 道郎

大日岳遭難「事故」は「事件」研究会へ

荻野和彦・岩坪五郎

東チベット最深处・怒江源流域から雲南の旅

田中昌二郎

ヤルン・カンのサーター・カル

マ、四年おくれの訃報

上田 豊

事務局報告

榮譽

訂正

編集後記

## 梅里再訪

松林 公蔵

はじめに

一〇月一九日から二九日にかけて中国雲南省の梅里雪山を再訪問する機会にめぐまれた。私にとって、雲南省を訪れるのは、一九九一年の救援隊、一九九四年の麗江医学調査、一九九六年の梅里雪山第三次隊、そして今回の再訪と四度目となる。九六年に梅里雪山の姿を飛来寺の丘から初めて仰ぎ見、雨崩氷河を経てキャンプ二まで登って、結果的には登頂を果たせずに撤収してから、はや八年の歳月が流れていた。

九八年から明永氷河上に、第二次隊隊員たちの遺体の一部と遺品があらわれるようになって以後、AACK会員たちによってその収容活動が継続されてきた。とりわけ、第三次隊の最年少隊員であった小林は、毎年必ず明永村を訪れ、遺体、遺品の収容とともに、村長や村人との友好関係の構築に努めてきた。彼のこれまでの第二次隊家族に対するひたむきな努力と梅里巡礼を通じて感得したであろう登山観には共感すべき点が多い。

今回の梅里訪問は、小林が井上夫

人と船原さんに同道して梅里に参るという話を伝え聞き、私たちのグループ、すなわち私自身と高知医大からAACKに入会した医師二名(奥宮清人、石根昌幸)、それに京大山岳部リーダーの根岸哲生、山岳部若手OBの鈴木健太郎の五名が、途中から小林隊に合流したかつこうとなつた。今回、私たちのグループ五名が梅里雪山を訪れてみようという気になつたきつかけは、八月の中国青海省の小旅行であつた。

## 青海省小旅行

八月中旬に中国青海省西寧で国際登山医学会が開催された。中島道郎(ダンナ)先生の厳命で、私は、少しく遠ざかっていた高所医学に関する学会に出席することとなつた。学会が終了してから、私たちが学会組も、笹谷哲也(ベベ)さん、田中昌二郎(シヨーチン)さん、高野省吾(ゴジラ)さんなどが組織するAACK青海省小旅行団と合流し、約一週間のアムネマチンを巡る高原の旅を堪能した。何の仕事上の責務もなく、ただただ広やかに展開する青海高原と青いケシの景色を眺め、夜は先輩たちと歓談するというまことに贅沢な旅であつた。登山隊のキャラバンもそれなりに楽しいものではあるが、登攀という所期の目的があるの

で、若干心のもちようは異なる。無事登頂後の帰りのキャラバンは目的を達した充足感はあるものの、心身ともの疲労感と諸種行事などに忙殺され、あまり旅を楽しむという感慨は得難かった。二〇〇〇年一月から、京大東南アジア研究所に着任して以来、毎年、年間一〇〇日を超える海外調査にたずさわる日常ではあるが、これも調査目的があるので、旅を堪能するという心境にはなかなかなりにくい。

青海省の高原旅行では、ヒマラヤのキャラバンよりもむしろ、山岳部現役の頃の、花を愛で、谷の清水を掬い、満点の星のもとで豪勢なたき火を囲んでの語らい、といった「山旅」の懐かしき思いがよみがえってきたものだった。

この旅行中、私が昔二〇代のころに味わった山を通じてのある感懐、そのような原風景への感動は、それから三〇年の歳月を経過して時代がかわり、現在部員も少数になったとはいえ、やはり二〇代の山岳部現役にも共通しているのではなからうか、という思いが去来した。そして、今見ている青海省の白いやまやまのたたずまい、どこまでも放牧が展開される広大な緑の草原、抜けるような青い空といった日本とは異なった風景のなかでもしも現役が登山活動を行う機会に恵まれたとしたら、たとえそれが処女峰の登攀ではなく未踏の領域の踏査行であったとしても、彼等の胸をうち、何かがかわるのではないかという感慨にとらわれた。このような思いにつきいたったもうひとつの契機は、自分はAACK

ヒマラヤ登山の保守本流ではなかったが、常にAACKのいわばNGOとしての立場にいる、若者に対しては常に応援を惜しまない、という笹谷さんのスタンスであった。

#### KUACの実情

九月になって、現役ならびに若手OBとの会合をもつ機会が訪れた。現在の山岳部は、現役四名で、そのうち一名は長らく山小屋でバイトし来年には単身南米にでかけるのとこと、二回生の一名はルームのはしごで怪我をし、実質的には数カ月にとわって山登りは医師から禁止されているよし、七月に入っばかりの一回生はやめるかもしれないという状況で、若手のOBが現役に協力して、何とか部活動を維持しているというのが実情である。それだけに、上級生ならびに若手OBには、それなりの危機感はあるものの、新入生を増やすという現実的方策はなかなか成就しないというジレンマにある。現役山岳部は、よい意味でも悪い意味でも、旧来の伝統をひきずっており、年間山行スケジュールは部員四〇名といった時代の方法を継承しようと努力し、部員の獲得も自ら意志して入部してくる者は歓迎するが、あえて部員勧誘のための「武士の商法」はとらないというようにうかがえた。

このような状況は、部員相互間の登山論議はもとより、山そのものを心から楽しむというにはふさわしくない。多くの大学山岳部がかかえる部員減少の悩みは、京都大学の状況にてらしても深刻な事態といっても過言では

ない。AACK若手会員の減少よりもいっそう切実な問題である。

AACK会員たちの多くは、山岳部時代の山登りを通じて、あるいはフィールドサイエンスに開眼し、あるいは一生の楽しみとして登山を継続し、山に登らなくてもきわめて親密なサロンを形成している。部員が減少しはじめてからの山岳部にも、同時代のつながりは一定程度あるようだが、年代をこえた意見交換をおこなえるような機会は格段に少ない。ときに笹が峰や同趣旨の会合がもたれても、OBのエネルギーが回りに圧倒されてしまつて、じっくりと話し合えるような雰囲気にはほど遠い。

この現役や若手OBとの会合で私は、医療レクチャーもどきのフィールド医学のスライドをみせて、過去のヒマラヤ遠征や高所医療の写真を提示し山登りと関連したフィールド学の哲学を紹介した。

現役諸君も、ひっそくした現状を打破し、何か転機となるような計画、方向性を模索しようという気にはなっている様子がみてとれるが、具体的な方策がつかめないようである。山岳部としての具体的な方策は見いだし得ないものの、現役リーダーの根岸君と若手OBの鈴木君が、山登りではないが今回の私たちの梅里再訪の旅に参加を希望してきた。かろうじて彼等はパスポートを取得していたが、このふたりは、外国にでるのは初めてという。それならばと、もう一人の活動的な若手OBにも声をかけたが、まだ彼はパスポートをもつておらず、時間的に間に合わなかつ

た。毎年のように海外に出かけてゆく学部学生をずっとみてきた私には、これら山岳部現役とそのOBに出会って、何か、素朴で貴重な過去の遺物をみるような感覚を覚えた。しかし、かつて先輩が亡くなった梅里雪山という山域あるいは東チベットには、彼等なりの一度見てみたいという強い関心はあったようである。

### 梅里再訪

今回の梅里訪問には、私のなかでは三つの目的があった。ひとつは、第三次隊の撤退以降、遺体、遺品がでてきたからも訪れる機会がなかった梅里に一度お参りしたいという個人的な思い。とくにナムナニで行をともしした治郎さんの夫人が同行されるということも心動かされた。第二に、八月青海省高原旅行で味わったゲマインシャフト的な旅の楽しみを東チベットの景観のなかで現役諸君とわかちあう時間をもてるということ。第三に、将来、中国雲南省の高地地域と東南アジア国境地域の二ヶ所で、医学調査を計画するための事前協議である。そこで、高所住民と平地住民の老化の比較を考えている地球研の奥宮医師と京大老年科の石根医師を同行した。

私たちは、一〇月二〇、二二日に昆明の雲南大学で医学調査の打ち合わせをおえて、陸路、大里、麗江を経て二三日に徳欽入りし、

その夜、空路をつかって後発した小林、井上夫人、船原さんたちの一行と合流した。九六年と比べて、徳欽までの道が整備されているのには驚いた。途次、秀麗な玉龍雪山、壮大

な長江第一湾曲、白馬山口とメコン源流の断崖に接して現役諸君の目は輝き、昨年、ラオスのメコン下流域で医学調査を行った経験のある医師ふたりは、感慨があらただったようである。小林が綿密にセツトした徳欽関係者と私たち一行との宴会は、夜遅くに始まったが、心暖かい交流の場となった。三四〇メートルを意とせず、船原さんはよく飲まれ、よく語られた。

翌日、快晴、飛来寺からの雲ひとつない梅里雪山の明永氷河をしたがえた眺めは壮観である。この眺望を求めて多くの観光客が訪れている。いくえもの塔中が建設され、大きな護摩が焚かれている。慰霊碑は、塔中群からわずかばかり離れたところに静かに建っている。碑に刻まれた日本人隊員の名前と京都大学学士山岳会と彫られたところが傷つけられ一部判読困難となっている。中国側隊員名と雲南省体委のところに傷はない。聖山に対する住民の思いを深く受け止めざるを得なかった。

慰霊碑での供香ののち、私たちは、明永村を経て、明永氷河がまじかに展望できる氷河山荘まで登り一泊した。夜は満点の星、船原さんはこの夜もよく飲まれた。井上さんは、ほとんどアルコールを口にされない。

翌二五日朝まだき、梅里雪山の頂上がひとつたび朝日に照り返されるや、その陽光は氷河上まで一気に下向する。永劫回帰のひとつまながら一瞬無限の美しさを呈して、刻々茜色の肌合いをかえてゆく雪面と氷河の景観を、私たちは無言で凝視していた。角度こそ異な

れ、亡くなった第二次隊の隊員たちもおそらくは眺めたであろう、聖山の朝日の輝きは、一種名状しがたい荘厳な趣をたたえていた。

二六日、小林と現役二名は終日、氷河上の搜索にあたった。小さな遺骨が五、「MISAGO」とかかれた高所帽、望遠レンズの一部など遺品が数十点回収された。その中には、治郎さんが、横山宏太郎氏から借り受け登攀に使用した「YOKOYAMA」のネーム入りの高所靴ひとつも含まれていた。「人の靴を借りていって、そのまま返さずに死んでしまうなんて、横着な井上らしいですね」と井上夫人が大切に持ち帰えられた。

遺骨と誰のものとも判別しがたい遺品類は、帰路、大理で火葬にふし、遺骨は大理石の骨つばに安置し日本に持ち帰った。

徳欽での要人との対応、明永村幹部との協力態勢構築と明永村住民との友好関係の維持、大理での火葬の手配でみせたその手腕、そして何よりもご家族に対する真摯なる小林の対応は、まさに水際だったものだった。たしかに、彼なくしては、ここ数年間のAACKの粛々とした遺体収容は不可能であったかもしれない。

火葬をみとつた小林一行と私は、大理から空路で昆明に向かったが、どのような理由か、昆明空港が一時閉鎖され、いったん成都に不時着し、再度離陸して昆明に降りた時は、夜中の一二時であった。空港には、急ぎよ北京から訪れてくれた中川潔(コタレ)と雲南省体委の張俊、徳欽側隊員として逝った王建華の夫人とその長男に出迎えられた。

京大の初登頂主義と次なる登山コンセプト  
少ない部員で、伝統的な山行年間スケジュールを何とか継承すべく、肅々と国内登山をこなしてきた現役にとつて、初めての外国旅行、それも広大な東チベット高原と急峻な渓谷の景観を自ら視認し、そのうえ、かつて先輩たちがこころざし、しかも挫折した梅里雪山に触れた体験と衝撃は、それぞれに少なくないものように印象された。それは、「私たちも、現役による高所合宿がイメージできるような梅里以外の未踏領域をも勉強し、来年四月には、新入部員が入るよう本気で考えてみます」ともらしていた根岸リーダーの言葉にも象徴されている。

もつとも、この種の個人的感動と学習意欲が、ただちに部の活性化につながるとは考えていない。感動を語り合い伝染させてゆく仲間も少なく、またそれが新入学生の胸をうつとも限らないからだ。

しかし、今回の梅里訪問は、「ご家族の思いをあらためて体感し、小林の山への姿勢を眺め、現役とふれあつた私にとつて、今後の登山のコンセプトをあらためて考え直すすべとなつた。

従来、京大がかかげてきた「未踏峰主義」の根底には、未知なる大自然の一角を征服するという、西洋的思考法が底流しているように思われる。一神教を背景とする西洋思想には、神と人間、人間と自然という、二項間の相克、相互の克服関係が認められ、東洋的な人間と自然との共生といった思想には乏し

い。西洋的ダーウィニズムを批判し、すみ分け理論、自然との共生を自然学というかたちでとらえた今西さんにして、山登りでは未踏峰主義を提唱しAACKの基本的コンセプトをかたちづくつた。一九三一年の発足以後、AACKがヒマラヤ・オリンピックの常勝プレーヤとして足跡を残した時代は、未踏峰に人類の足跡をしないこと自体が壮挙とされ、人類の自然への挑戦という意味でも探検的意義を認められていた。その時代、未踏峰登頂に付随する自然生態系の破壊、周辺地域におよぼす経済混乱、地元住民感情への配慮は、ともすれば探検的快挙の後方におしやられ顧みられることも少なかった。登頂に成功した登山隊も、初登頂した地域をふたたび訪れることは稀で、まさに百代の過客にすぎなかつた。エベレストの登頂後、クンプ地域に終世がかつたヒラリー脚は例外的であるう。

しかし近年、古典的探検をおこなう未踏峰自体が減ってきたことはまた別に、自然生態系の保護、その生態系に長きにわたつて暮らしている住民感情の尊重という視点が強調されるようになってきている。京大がみたび挑戦し登頂をはたせず、しかも貴重な多くの人命を失つた未踏の梅里雪山は、今、そのような時代的状況のなかで、周辺地域チベット住民が聖山とあおぐ霊峰の地として観光客の目を集めている。

明永村の住民のひとたちへの健康インタビュウを行つた際、梅里雪山登山のことをそれとなく聞いてみると、ほぼみな異口同音に「観光客がきてくれて村が潤うのはたいへん

ありがたいが、もしも聖山に人が登つてしまえば、山の霊性が失せるのでせつたいに登らせない」という声ばかりであつた。

住民たちによつて代々「聖山」として崇拝され、今や「聖山に人類が登ることは禁忌」と自覚しはじめられた今日、住民の切なる感情に抗してまでも初登頂を達成する論理は正当化しにくい。過客である初登頂者にとつてそれは歴史に残る快挙とはなつても、聖山が異教徒によつておとしめられた宗教感情のうえでダメージは、永遠に敬虔なる住民たちを苦しめるに違いない。

このような住民の聖山に対する「登山禁忌」の自覚は、たしかに一九九八年以降に顕在化したものではあるうが、それを押し戻すことは時宜になつていそうにない。

人類が頂上に達した記録の有無という意味での未踏峰は確かに少なくなつたが、まだまだ生物多様性が残り、自然地理学的にも未踏査で、しかも人文地理学的にも未知な領域は残つていると思う。現地の自然生態系をむしろ愛でつつ、同時に住民の伝統的価値観と共生しながら、未知の領域の峠を超え、谷を遡り、尾根を縦走するといった山登りの形態もあり得るような気がする。まだまだ人跡の乏しい高所領域をさまざまな関心からの視点をもちて踏査してゆく、いわば、総合的な高所地域踏査研究といった形式の山登りは、京大にこそふさわしいのではなからうか。その過程であるときは、AACKとKUACが混合パーティーを組むことができれば、学と岳が渾然一体となつた京大式山登り集団のゲマイ

ンシャフト精神の継承が可能でもある。山登りとは、時として命をかけざるをえない真剣な営為ではあるとともに、本質的には、人間にとつての高貴な楽しみでもある。AACKが総力をあげて登山をおこなったのは、そうしないと達成できない時代の「未踏峰」が対象だったからだ。しかし、いまでは、「行きたいもの」として、行きたい山に登る「有志の山行を会があとおしするほうが時代になっている。一九六〇年代から一九八〇年くらいにかけて国内で展開された京大固有の分散山行は、優れた登山の方法論であろう。

「初登頂主義」にかわる山登りの理論のうえでも、時代の変化とともに、次なるコンセプトを創出する時期にきていよう。

最後に、今回の梅里訪問に際して、現役ぶたりの経費の一部を笹谷さんから個人的にカンパいただいたことをしるして、感謝申し上げます。

## AACK人物抄

### 宮崎武夫さん（一九〇五—一九四五）

平井 一正

私は残念ながら宮崎さんとお会いしたことがない。亡くなられたのが一九四五年六月八日でまさに敗戦直前であり、私はまだ中学二年生であったからそれは無理からぬことであ

ろう。

AACKの諸先輩の中で今西、西堀（以下敬称略）の陰に隠れて、宮崎はあまり有名でないが、彼のAACKの活動に果たした貢献は実に大きい。例えば一九三四年（昭和九年）一月の白頭山遠征、一九三五年二月の済州島漢拏山（一九五〇m）、一九三八年八月の内蒙古学術調査隊に参加し、そして抜群のマネージャー役として各遠征隊を支えた。

宮崎武夫はどういう人であったのだろうか。心温まる数々のエピソードから、人間的な心優しい気配りの人と想像される。同じ頃の人で健在な人がほとんどおられないので、わずかに残された今西錦司、桑原武夫、そして浅井東一の文章で推測するにとどまるが、ぜひ宮崎武夫のひととなりを知ってもらいたいと思う。

#### 一・裏方としての宮崎

今西たちが京大に入学したころ、京大には山岳部というものがなかった。あったのは旅行部で、そのなかに山岳班、スキー班、遠足班という三つの班があったが、その山岳班はかなりレベルの低いものだった。そのうち山岳班を立て直してくれという懇請をうけた今西はまず仲間を集めた。宮崎はそれまではスキー班に属していたが、このとき山岳班にかわってきた。そしてたちまちその事務的才能が認められて、総務とかマネージャとかいった仕事を引き受けてもらうことになった。

好マネージャをえたので、今西たちはさかんに企画し、またそれを実現化していった。

二、三の例をあげると、岩登り練習のための夏の剣沢の合宿、スキー登山の根拠地としての笹ヶ峰ヒュッテの建設、近代登山ならびにヒマラヤ登山研究のための図書関係の充実、といったようなことを、一つ一つ実現させていったのである。庶務とかマネージャとかいうものの仕事は、こうした華々しい活動に比べてあまり表面にでない。宮崎はそういう裏方的な仕事をよくやり、AACKの結成とその後の発展に無くてはならない人物になった。

#### 二・名会計係

宮崎は大阪の信行社小学校から天王寺中学へ進み、弘前高等学校から京大経済学部へ入学、昭和四年に卒業。浅井は高等学校の三年間をのぞいて（浅井は山口高校）、宮崎とは小学校からずーと一緒で、大学卒業後も同じ大阪市というつながりがあり、一番の親友であった。浅井が書いた宮崎の追悼から、そのいくつかを紹介する。

宮崎からくる手紙はカーボンコピーで書かれていて、その写しが必ず彼の手元にくっっている仕掛けである。当時の山仲間はいずれ劣らぬズボラで手紙をもらっても用件を忘れることが多かったが、何月何日、これこれの件につき手紙を差し上げたが、返事をよこせと言われると、なかなか痛かった。この方式はいつの間にか山仲間では代用のきかない貴重な存在になっていた。

白頭山ではすでに最良の会計主任であった。京都駅を出発する朝、親切な友人が心をこめた果物の籠や菓子箱をくれた。三時にな



つても四時になっても宮崎は汽車弁を買ってくれそうにない。飯はどうしてくれと聞けば、「今日は昼飯も晩飯も抜きゃ。もろうた

果物で充分カロリーはあるはずや」。万事この調子で引き締めたおかげで、比較的多人数での長期登山だった白頭山行きにもあまり経済的苦痛を感じずにすんだのだっと思つた。

蒙古に行ったときは、このカーボンペーパー式に磨きがかかって、会計に天才的ながつちりさを見せてくれた。あまり締められるので同行の若い連中には気の毒な気もしたが、あながち締めるばかりでなく、大連行きの船の中などでも、一行の食欲が減退してきたことを見て取ると、次の食事は、皆が食堂に行くまでにちゃんと特別料理を注文して、テーブルに並べて置いてくれる程の女房ぶりを發揮したものだつた。

### 三・国内山行き

浅井は語る。山に行けば人間自然の姿に戻

るのは誰でもだが、宮崎のように飾り気のない自然人になりきれ人間も少なからう。腹が減っていて、うまいと言えば、我々の二三倍位の飯を食うときがある。あまり食うのが胃が一杯になって、食った物が口に逆流してくる。「アー出てきた」と言いながら、出てきた物をまたムニヤムニヤと咀嚼してのみこむ。他の人間がやったら汚らしいが、宮崎がやると牛が反芻運動をやっているように、全く自然にみえる。山に入って、四、五日経つと、箸を使うのも煩わしくなるのか、オカズなどは簡単に手でつかんで食い始める。少々腐りかけた物でも意に介せず食つたが、時々失敗して腹をこわすときもあつた。

食べ物に無頓着であつたと同じくらいに恰好もなかなか振るつていた。ある洋行帰りの登山家が「宮崎の仲間は風体があまりにも汚いので、一緒に山歩きするのにしりこみする」といつていたくらいである。

桑原は、笹ヶ峰ヒュッテができた頃、宮崎らと一緒に火打などへ登つてゐる。ある日、真川の急斜面をトラバースしていたとき、桑原をのぞく四、五人が板状雪崩に巻き込まれた。幸い谷に落ちる前に止まつたので大事には至らなかつたが、雪煙の中を宮崎はニコニコ笑いながら、両杖の一本を空にむけて高く差し上げながら流されていった、あとで掘り出してもらつたときの目印のつもりや、やっぱり出たな、と照れたように笑つた。

### 四・ジンギスというあだ名

彼のあだ名は「ジンギスカン」であつた。

今西たちはそれを略して「ジンギス」と呼んでい

た。今西は言う。「頬ひげの濃い男だつたが、心根のやさしいものふで、彼のあだ名はなにかの間違ひであるつ、笑つと右か左か思い出せないが、一本歯の欠けているのが印象的だつた、彼は個性の強くないところに、かえつて彼の個性があつたともいえるよう」。

浅井によると、宮崎はよっぽど吹雪かないとなかなか彼の自慢のソフトを脱いで、耳隠し帽に変えたりはしなかつた。茶色で毛のたつた、昔はさぞ立派であつたらうと想像される。ステットソンだつた。これをかぶつてアラシの皮を肩から脇に斜めにつけて、下腹をぐつとつきだして、ひげ面で滑つてゐる様子はなかなか堂々たるものだつた。ジンギスカンの名はこれから出たものだつた。あこひげに雪がつくと益々立派さを増した。彼の父親は軍医で、小さいとき北海道で暮らしたせいもあるのか、スキーはなかなかうまかつた。



桑原はこのことに加えて、宮崎はブツシユの中をスラロームを描きながら滑降りたりするとき、邪魔になる小枝を、いや相当握り太の枝をさえ、両手でねじまげながら突破する猛烈な特技をもっていたことを紹介している。そんな彼であったが、卒業して大阪市役所に勤務するようになり、結婚すると、むしろきちょうめんに剃刀をあてていた。事実彼のジングスのなものは表面からだんだん消えて、市役所服という灰色の詰め襟を着用した彼は、実直という印象を与えるのみであった。

##### 五・ジングス笑いとジングスの禪

宮崎はやたらに甘いものが好きで、合宿食料の中などに羊羹でもあれば、いつの間にか自分のルックにしのばせておいて、合宿の食料が寂しくなりだす頃になると、ぼつぼつ嬉しそうな顔をしながら、例のしのばせてある奴を出してくる、そんな男であった。糖分が好きであったせいも、年中歯痛になやんでいた。大学の二年の夏だったか、浅井は宮崎と二人で徳本峠をこえた。そのときの歯痛はよほど痛かったとみえて、歩いている最中に急にウーンとうなってヘタってしまふ。歯の虫穴にヨードチンキをそそぎこんだり、アスピリンを飲ませたり、介抱することしばしばで、やっと御神輿があがるのだが、ものの二時間もすると悲壮なヒゲ面をしてまたヘタってしまふ。それでも朝になると元気をだして、なかなか滞在しようなんて弱音を吐かなかつた。このときの歯痛は、とうとう槍の肩の小屋であったか、歯ぐきから膿が破れ出てケリ

がついた。

歯の痛くないときは、虫だらけのラングイ歯をむき出して、低いうめくような声をだしながら笑っていることが多かった。シーンとした山の夜、たき火でほのかに彼のヒゲ面が照らし出されているとき、その低い笑い声を聞くと、はじめての人はゾーとするそうだった。これに「ジングス笑い」なる名があるのも非常に特徴があるからであろう。小枝のたき火では満足せず、とてつもなく太い木を探してきて、ジャンジャン火を燃やすのも、彼のくせの一つであったが、この火に暖まりながらジングス笑いを聞いていると、山旅の条件の一つが満たされたように満足感を味わうのであった。

彼のきれいな好きと離せないのは「ジングスの禪」である。宿営準備を終わって沢において米をあらいながら、ちよつと上流を見ると、すでに遅し！ ジングスの禪が一端を石に押さえられて、ヒラヒラ溪流の中に晒されているのだった。何故か知らないが、水をくむのに都合よい場所より決まってちよつと上流に禪を流す癖があった。おかげで宮崎の禪の汁入りの飯を食わされた人間はすくなくないであろう。

##### 六・ひととなり

雪崩で流されているときもニコニコ笑って流されていた宮崎だが、桑原は、長いつき合いの間、一度として彼の顔に不満と怒りの影のさすのを見たことはなかった。結婚したと告げたときも、自分の持家を朝鮮人に貸し

たら、家をむちゃにしようって困ったといつたときも、小島烏水さんに子供の命名をたのんだときも（因みに高子さんと名付けられた）、奥さんの病気が長引きそうだったといつたときも、ただ彼の微笑しか記憶していない、という。

彼はそうして人生を微笑をもって送り迎へしながら、山に対してはやはり実直さを変化無く持ち続けた。

浅井が大阪市立病院に勤務してから、ときどき東雲町の彼の自宅を訪れたが、二階の床がぬけはせぬかと心配するくらい、本を積んだ中に小さい机を置いていつも勉強していた。昭和一九年頃はフィリップのカラコルムの訳の仕上げをやっていた。（これは後にチヨゴリザ遠征のときに役に立った）。また日本山岳会関西支部ができてから、それをうまく進めて行ったのは彼の力が大きかった。さらに大阪で出していた雑誌「ケルン」の編集に相当大きな役割を演じていた。（宮崎がケルンに投稿した文の題目を付録に示す）。戦前からすでに中央アジア、カラコルムの研究をよくしていたことが分かる。

あるとき宮崎は浅井を訪ねて、いままでケルンにたびたび寄稿してもらったが、稿料を払っていなかった、少ないがこれをとっておいでくれ、といって、断る浅井を制してなにがしかを置いていったことがある。宮崎はそういう律儀な男であった。

戦争中、勤め先の大阪市役所で市民疎開の世話役をしていたため、昼夜晴雨を分かたず活動して、遂に急性肺炎で倒れ、帰らぬ人と



なつた（一九四五年六月八日）。他人の困っているのを見ると、自分の健康が破壊されつつあるのも忘れてしまつて、無茶苦茶走り回つたのである。宮崎は最後まで自己犠牲を忘れ得ない美しい山男であつたに違いない、奥様は勝ち気な八キ八キした方だつた。奥様は宮崎が亡くなつてから更に戦災にあり、二人の子供さんを抱えて生活のために涙ぐましい苦闘をされたのだつたが、昭和二二年に大流行を見た発疹チフスで亡くなられた。

戦雲があわただしくなつてから、今西は彼を訪ねて、蒙古行きをすすめたことがある。今西が張家口に新たにできる西北研究所の所長に就任することがきまつたときである。宮崎は断り、そしてそれが、今西との最後の別れとなつた。今西は嘆く。「ぐちであるといわれても、あのととき蒙古に行つていたら、あるいは死んでいなかったかもしれないと思つたり、いままで生きていたら、その裏方的人柄がかわれて、少なくとも大阪市の助役ぐらいはつとめていたにちがいないと、思つたりしたくなるのである」。

次の桑原の文は宮崎のひととなりをよく表している。

ジンギスをむやみに偉大な人物に仕上げることは、おそらく彼自身の趣味にも合うまい。彼は恥ずかしがるだろう。彼は登山家の中でいわば天才型ではなかつた。リーダー型でもなかつた。今西や西堀ほど、登高においても都会においても個性的ではなかつた。彼はいわば立派な凡人であり、一流のフォロワーであつた。それは実は中々むずかしい境地だが、

忙しい世間はややともすればそつという人物を忘れるという妄想をおかしやすい。しかし、後になつて何か現実的な仕事をしようとするとき、ああこんなこともまだしていなかつた、と気づくとき、もし彼が生きていたら、きつとしておいてくれたのだが、という言葉のうちに、深く惜しまれ懐かしまれる。宮崎君はそんな人格であつた。

以上、宮崎の人物の一端を紹介したが、もうすこし長い間生きておられたら、きつと私たちにさらに大きい影響を与えてくれたに違いない。夭折が残念でならない。最後に、本文を書くに当たつてお世話になつた田中昌二郎、竹田晋也の両氏に感謝する。

#### 参考文献

- 一、今西錦司：「ケルン」のころ、ケルン解題、アテネ書房、pp.53-60, 1991.
  - 二、浅井東一：宮崎武夫を偲ぶ、「山岳」45年、pp.171-175, 1950.
  - 三、桑原武夫：立派な凡人 宮崎武夫君のこと、桑原武夫紀行文集3、河出書房、pp.123-127, 1968.
  - 四、宮崎武夫：蒙古横断、朋文堂、昭和18年
- \* ステットソン：米国の紳士帽子メーカーカ名（平井注）

付録 昭和八年から一三年までの雑誌ケルンに宮

崎が発表のリスト

夏山の野菜食（一号）、沢歩きと草鞋（二号）、支那トルキスタンとスタインとその新著（三号）、ワックスの転向（六号）、我が国山地に用ふるス

キーの長さ、形式その他に関する討論（今西、西堀、木原、田中喜左右衛門、奥、扇田、高橋、宮崎）（七号）、近頃の山の本（同）冬山のスキー技術に関する討論（今西、西堀、木原、奥、高橋、加納、宮崎、森本、西岡、辻谷）（八号）、雪の御岳と苗場山（九号）、貼りシールの用法について（九号）、笹ヶ峰牧場をとりまく山々（一〇号）、天山川脈を巡つて（一一号）、白頭山冬季遠征の概要（一二号）、丸型テント図譜（三〇号）、山岳遭難救助機関の創定について（三一号）、「登高行」と慶大山岳部（三六号）、ナンタ・コットとロングスタッフ（四二号）、アジアの高山（四二号）、ヒマラヤ山脈（四八号）、インド測量部の地図（五三号）、ウオークマン氏を思う（五八号）、ヒマラヤの新地図について（五九号）、西藏放談（六〇号）（ケルンは六〇号で終刊）（この西藏放談が宮崎と河口慧海の対談である。ニュースレター一三三号参照）

## フォスコ・マラーニ二さん、 ありがとう

本多 勝一

本誌前号での谷泰氏による「フォスコ・マラーニの死にちなんで」は、多くを教えられただけでなく実に感動的な文章でした。私もマラーニ二氏にかつてほんの少しばかりお世話になりましたので、このさい一筆それに触れて感謝の意を表したいと思います。



**あるくみるきく**○1975.4, No.98 150円年間(12冊)1500円

編集・発行→東京都台東区台東1-12-11第二コマビル近畿日本  
 ツーリスト(株)日本観光文化研究所 宮本常一 電話03-332-0982  
 号110 印刷→東京都台東区日暮2-11-3中島印刷株式会社

**あるくみるきくをお求めの方は**

年間購読料(12冊)→1,500円 バックナンバー53号以前→60円、54号  
 ~94号→100円 95号以降150円(送料650円(いずれも手付)現金書留  
 が切手で当研究所へ。またはツーリストの窓口へどうぞ。

国策・中仙道・土佐西・筑前・津島・山陰海岸・十津川群野  
 冬の北海道・奥羽根・奥路【以上合本】52青梅・53南日本の築場・  
 54秩父・55名瀬・56探検学校・57奄美大島南端・58島根登・59山  
 形釜通・60アフリカー園・61秋の北海道・62豊和・63中部日本の築  
 場・70私たちの旗・71鎌倉・72千社札・73子供を旗へ・74土佐山中  
 75竹細工・76私の旗・77対馬・78輝と遊ぶ・79トカラの島々・80シ  
 シリムカのはとりに・81スラウエシ島・82津軽十三湖・83久賀・84  
 東日本の築場・85身近な自然・86樺北の旗・87武蔵府中・88サン  
 3陸の長い旗・89紀の川にまつて・90羊をおって・91飯後・92八重  
 山紀行・93奥三河・94竹細工2・95温泉正月・96ニューコンをくだる  
 97青春彷徨



昭和14年のベナゴリ(沙流郡平野町)写真 フォトコンパニイ

**目次**

特集 人生を聞く一沙流川の人物語					
人の生きてきた足跡を……文・能田忠義	……	……	……	……	5
祖父のウバシクマ……文・川上勇治	語り・川上サノウク	……	……	……	7
祖母のウバシクマ……文・川上勇治	語り・川上ナトク	……	……	……	12
コタンの火事……文・川上勇治	語り・木村キミ	……	……	……	14
アリマキナ祖父の災難……文・川上勇治	語り・川上金次郎	……	……	……	16
モチャシ爺さん……文・川上勇治	……	……	……	……	20
あるいたみたさいた……香月洋一郎	……	……	……	……	2
谷地のおぼけ……文・川上勇治	語り・長野チエ	……	……	……	22
洪水の機に……文・川上勇治	語り・二谷一太郎	……	……	……	26
菊三おとの放浪……文・川上勇治	語り・木幡菊三	……	……	……	28
馬と私……文・川上勇治	……	……	……	……	33
ウバシクマのこと……文・能田忠義	……	……	……	……	41
西方見聞録 2……相沢昭男	……	……	……	……	42

**今月のスタッフ**

●企画・監修→宮本常一 ●編集→能田忠義・宮本千鶴 ●レイアウト・佐々木真紀子・P.42-43→相沢昭男 ●通信編集→伊藤幸司

一九八二年の四月から九月にかけて、『朝日新聞』の学芸頁で「アイヌ民族」という連載を二〇二回つづけました。これは現在私の著作集（朝日新聞社）第二六巻として刊行されていますが、連載の第一八回（同年五月一〇日夕刊）地方によっては朝刊）、「コタン」で、マライー二氏の写真を使わせてもらったのです。

その写真は、北海道の中でもアイヌ人口が圧倒的に多いコタン（村）「二風谷」（ニフタニ）現在には合併して平取町の一部）の全景で、「二風谷コタン」一九三九年、フォスコ・マライー二氏写す」とされています。

一九三九年はマライー二氏が来日した翌年にあたるので（それとも、日本に向けて出発したのが「一九三八年暮れ」と谷氏の文にあるから、到着は三九年か？）、来日直後にもうコタンを訪ねているわけです。この写真を新聞で使うべくマライー二氏に当時連絡をとったことは覚えていますが、連絡がついて稿料を送ったかどうか、今では確認できません。マライー二氏のコタンの写真は、ほかにも見ることができません。私のところにある文献では、札幌テレビ放送から発行された大冊『エカシとフチ』（一九六三年）と、月刊『あるくみるぎく』（一九七五年四月号）です。前者はアイヌ民族男女長老へのインタビュー集、後者は十勝の沙流川流域に住むアイヌ長老からの聞き書きです。そしてマライー二氏の写真は、前者の中で平取町ペナコリの川上勇治氏が担当している章に三枚使われ、全篇を川上氏が書いた後者では一枚使われています。

いずれも一九三九年の撮影です。

これらの写真は、二風谷におられるアイヌ民族出身の民族学者・萱野茂氏が保存していたもので、今となれば貴重な記録写真となりました。

## 妙高の雪

横山宏太郎

大学入学以来二〇年以上過ごした関西から、出身地である高田（新潟県上越市）にもどってもうすぐ一六年にもなります。京都へ行く機会は少なくなりましたが、皆様がヒュッテや、スキーにこられた折りにお会いできるのは楽しみです。

この冬に池ノ平で田中昌二郎さんにお会いしたとき、「君はときどき笹ヶ峰の積雪は××センチ・・・と知らせしてくれるが、某先輩などは、君がスキーで現地まで行って計つてくると思っているに違いない」とおっしゃいます。まさか、とは思いましたが、ついでには雪に関連したことを書くようにとのおすすしめがありました。書いてみたらなにか身の上話のようなことになりましたが、しばらくおつきあいください。

私は新潟県東頸城郡、いまでは典型的な過疎の地（高田から東へ約二〇キロメートル）で生まれ、小学校後半からは当時の高田市で育ちました。高田市はその後、直江津市と合併し現

在の上越市となりました。「上越」という地名は新潟県内では違和感なく受け取られますが、県外ではそうとは限らないようです。「上越市」はどこにあるのか、と聞かれることもあり、上越市の「上越」は、「かみえちご」の「上越」で、「雪の高田」の高田が直江津と合併したまちですよ、と答えます。混同されやすいJR上越線の「上越」は、上州・越後ですね。新潟県内で上越線が走っている地域は、上越ではなく「中越」です。

さて高校までは笹ヶ峰のキャンプや妙高・火打登山、冬はスキーと、妙高と雪に親んでいました。京大山岳部に入ったところ、おもいがけず笹ヶ峰ヒュッテ（通称パットレス）のない姿も記憶にありました。が山岳部の管理であり、また妙高の雪とのつきあいが続くことになりました。大学院時代はヒマラヤの機会をたくさんいただきましたが、長居もついに限度になったため、中島暢太郎先生はじめ諸先輩のお世話で武庫川女子大学に勤務することになりました。安田武先生のお手伝いで山岳スキー部の合宿にも同行しました。三本木にあった山岳スキー部のレルヘンヒュッテが豪雪で倒壊し、学校の施設としてレルヘンヒュッテが建設されたばかりでした。安田先生の発案で、ヒュッテで気象観測をすることにしました。唐松林の中に鉄塔を立ててセンサ類を取り付け、記録部は屋内におきました。まだ今のようなデータロガーなどない時代で、いろいろ苦労しましたが、システムの改良を経てその後も観測は続いています。ここでもありがたいことに妙高の雪との

つきあいが続いたわけです。

やがて、農林水産省北陸農業試験場(当時)へ勤務することになりました。なんと、これこそ思いもかけなかった出身地に職を得ることになったのです。ここでも樋口敬二先生をはじめ諸先輩にお世話になりました。武庫川女子大での衣服快適性の研究もなかなかおもしろく、高性能の人工気候室もできてこれからさらに発展しようというところでした。かなり迷いましたが、列車から見た妙高の雪が最終的には決断させてくれました。不満といえば雪のフィールドへ出る機会がないことだったので、ヒマラヤには遠くなるかもしれないが、この雪と始終つきあえるのもいいと思つたのです。

関西を離れるにあたって、病床の今西錦司先生をお見舞いしました。お加減はもうだいぶ悪かったころと思いますが、そのときは比較的よい状態で、「高田に戻って雪の仕事をするつもりになりました」と申し上げると、「そつが、そらよかつたな」といつてくださいました。

北陸農試でいただいた仕事は、「降積雪の特性解明」というものでした。雪は農業にとつては制約条件でもありますが、一方で水資源、冷熱資源として利用されています。その分布と変動を明らかにして、雪利用、雪対策を進めるといふものです。そこで、まずはフィールドと、積雪調査をすることにしました。研究室の初代室長、大沼匡之さんの時代(約四〇年前)から、研究室の伝統的な仕事として積雪調査が行われていました。当時は山地

が中心で、妙高山の池ノ平スキー場と、関川の対岸になる袴岳側の斜面とが対象でした。私は調査地域を広げ、生まれ故郷でいささか土地勘のある東頸城方面にも足をのびしました。高田平野の南東側に連なる山々に入り込んでいったあたりです。車で走りながら、なるべく開けた代表性の良さそうなところを見つけて、調査をしていきました。妙高方面も車を使って調査する地点を追加しました。池ノ平スキー場では、リフトであがって、調査しながら滑り降ります。

調査方法は単純です。神室型サンプラー(大沼さん設計)という、金属の筒を数本つないだものを先端が地面に届くまで雪に差し込み、筒にふられた目盛りから積雪深を読みとります。ついで中の雪が落ちないように注意しながら引き抜いて、雪を袋にあげてバネばかりで重さを量ります。これを断面積(二〇平方センチ)で割ると、単位面積あたりどれだけの雪があるかがわかります。ふつうは降水量と同じ、水になおしたときの深さ(ミリ)を単位として表し、積雪相当水量といえます。積雪の平均密度も計算から得られます。単純とはいいながら難しさもあります。雪が三mにもなると、差し込むにも苦労します。雪質や雪温によってはなかで雪が凍りつき出てこないことも、逆に引き上げるときに中の雪が落ちてしまうこともあります。

雪の量は、標高とともに増えていくのが普通ですが、増え方は地域によって異なり、東頸城方面は妙高方面に比べ同じ標高でも雪がかなり多いことがわかりました。長期的にみ

てどのように変化するか、今も調査を続けています。

池ノ平スキー場の最高地点は「カナメ」といつて、標高一五四〇mです。最後まで残っていた一人乗りの古いリフトであがっていくのですが、近年は合理化で運転休止になってしまいました。スキー場のご好意で、機械力で送っていただいたこともあるのですが、昨冬はスキーとシールで登らざるを得なくなりました。ほかにそんな道具を持っている人がいないので、休日に一人で行こう(ほんのちよつとですがツアー気分)としていたら、ちよつとスキーにきておられた田中昌二郎さん一行がつきあってくださいました。雪が多く作業が大変な時期でしたので、大変助かりました。

私が高田に戻る直前は、三冬連続して高田で最大積雪深三m前後という大雪でした。しかしその後は、暖冬少雪が続いています。職場では「雪に逃げられた」とからかわれました。高田は豪雪地といいながら冬の気温が高



山地の積雪調査

く、ぎりぎりまで雪として降っているようなところですから、ちよつと気温が上がれば雪が雨に変わってしまうのです。そのような冬でも山地の雪は比較的安定しています。春になつてかなり雪が降つたため遅くまで残り、五月の連休に笹ヶ峰までの除雪ができなかつた年もありました。地球温暖化が本当に進んだら雪はどうなるか？を考えてみると、似たようなことがいえます。上越のようなところで影響が早く現れ、平野部は一〇〇年後には無雪地帯です。妙高の雪にも、低い方から次第に減少傾向が出てくることになるでしょう。

十数年前には中尾正義さんが新潟県長岡市にある科学技術庁雪氷防災実験研究所(当時)におられて、国内の山地積雪情報収集網を構築中でした。妙高山域での地点選定をお手伝いし、下見のため冬に笹ヶ峰に入り、旧ヒュッテに泊まつたこともありました。観測機器は笹ヶ峰の国民休暇村駐車場の山側に設置されました。たしか営林署の小屋があつたところと思います。積雪深や気温のデータは電話回線を通じて確認、回収できる仕組みです。これを時々見せていただき笹ヶ峰の積雪情報としてお知らせしているのであつて、決して私が笹ヶ峰までスキーでいって測っているわけではありません。

昨年の秋、(社)日本雪氷学会の全国大会を高田で行いました。その公開講演会で「上越の雪と人、五〇〇年」と題して講演し、「スキーの伝来と広まり」についてもお話ししました。ACKと妙高の雪の縁にもふれているので、皆様にはよくご存じの話でしょ

うが、その部分を紹介します。

スキーの伝来と広まり\*

一九一一年、高田にあつた第一三師団にオーストリアからレルヒ少佐が視察に来ました。当時の師団長、長岡外史は、スキーを軍事的な意味だけでなく、雪国の人を明るく積極的にするために有用と考えていたようでした。レルヒ少佐にスキーの指導を頼みました。レルヒ少佐はよろこんで軍人のみならず民間人にもスキーを指導しました。また、長岡師団長は女性にも積極的にスキーを広めるべく、将校の夫人たちにスキーを奨励しました。学校などでもスキーを冬の体育に取り入れられました。翌年には早くも第一回のスキー大会が高田郊外で開かれています。

ところで上越市から約四〇キロmの笹ヶ峰(妙高高原町)、標高三三〇〇mに「京大ヒュッテ」があります。一九二八年の建設(最近改築)で、国土地理院の地図にも名称が記載されています。なぜ京都から遠いこの地に？と思います。これにはスキーが関係しているのです。日本にスキーが伝わるとすぐに登山家たちは、冬山登山の道具としてスキーを積極的に取り入れていきます。関温泉(妙高村)はスキーの練習場として有名で、いくつもの大学山岳部がスキー練習の合宿を行っていました。後に第一次南極越冬隊長となる西堀榮三郎氏は中学のころから関温泉でスキーを学んでいました。そのころ、新潟県立高田中学校教頭から京都府立第一中学校を経て同第二中学校校長に転任された中山再次郎先生



職場の観測露場から望む妙高山と火打山。妙高山のちょうど裏側が笹ヶ峰になる。

が「関西スキー倶楽部」を創設し、レルヒ直伝のスキーを関西に広められました。そこに参加した西堀氏(府立一中卒)は、ともに関温泉などでスキーを学んだ高橋健治氏、今西錦司氏らと京大に進み、スキー登山を通じて慣れ親しんだ妙高高原の一角にヒュッテを建設し、以後スキー登山の基地として大いに利用されることになりました。かくいう私も大いに利用した一人です。

スキーは上越に始まり、熱心な人たちによってどんどん広まって行きました。以来、冬のスポーツ・レクリエーションとして、また雪国の観光産業として、スキーはきわめて重要

な地位を占めてきたことはご存知の通りです。ここで出てくる高田中学は、私や三年先輩の渡辺良男さんの母校、高田高校の前身です。京一中、京二中、さらにそれを引き継いだ新制高校は、いうまでもなく数多くの先輩(田中昌二郎さんも)の母校です。それらがスキーや妙高の雪に関わる縁があることを嬉しく思いながらお話ししていました。

職場は、独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構中央農業総合研究センター北陸研究センターという、とんでもなく長い名前に変まりました(センターが二重なのも変)が、私は相変わらず妙高の雪とつきあっています。まだ分らないことも多いということでもうしばらく続けたいと思っていますところです。皆様こちらへおいでの時には歓迎できるくらいの余裕を持ちたいと思いつながらなかなか実行できませんが、今後ともよろしくお願いいたします。

\*横山宏太郎(二〇〇四)「雪氷」第六巻  
三三三―三三七より

### 追記 新潟県中越地震について

二〇〇四年一〇月二三日に中越地震が起こり、新潟県中部にきわめて大きな被害を与えました。被災地域は国内でも有数の豪雪地帯であるため、これからの冬には、さらに雪による様々な被害の発生が心配されます。そこで、(社)日本雪氷学会・日本雪工学学会合同新潟県中越地震・雪氷災害調査検討委員会が発足しました。私もそこに参加して、災害の防止・軽減に向けて及ばずながら努力してお

ります。いずれ機会があれば皆様にご報告したいと思えます。活動状況などは、[http://snowy.web.infoseek.co.jp/winter\\_eq/](http://snowy.web.infoseek.co.jp/winter_eq/)をご覧ください。雪に関連する問題は新聞等でも報道されており、様々な専門分野、お立場からのご助言や、ご支援をいただければたいへんありがたく存じます。よろしくお願ひ致します。

## 五月連休にヒュッテからワンデイで楽しめる山スキーコース(その一)

高尾文雄

一・三田原山  
スキー技術 初級、体力レベル 楽 標高 差 一〇〇〇m、標準時間 登り三時間、下り一時間

ヒュッテの東側にある『雪山賛歌の碑』あたりから涸沢の右岸に取り付く。このルートは山頂までシールで登ることが出来る。取り付からしばらくはブッシュがうるさいので、すぐに涸沢に入ってそれを辿っていく。途中で滝が出てくるが簡単に巻ける。

標高一七〇〇m位からタンネ帯となり沢が浅くなるので、右岸へ上がってタンネを縫うようにシールで登る。標高二〇〇〇m位からタケカンバの疎林となる。傾斜がきつくなってくるので、斜登行でジグザグを切って登る。しばらく

く登ると外輪山の稜線に出る。シールのままで北へ稜線に沿って一山越えたところが三田原山の頂上である。平なのでここが山頂が分かりにくい。頂上を示す木の看板がある。

下りは、先ほど越えた外輪山の手前のピークまで戻り、滑降を開始する。出だしは急であるが、広い斜面で疎林のため自由にターンが描けて快適に滑れる。標高一七〇〇m位から涸沢に入って沢の中を滑る。沢は途中に滝が出てくるのでスピードの出しすぎに注意。滝はスキーをはいたまま簡単に巻いて滑り降りられる。

最後の堰堤は右岸でも左岸でも巻けるが、どちらを取っても沢には戻らずそのまま岸を林道まで滑り降りる。林道をヒュッテまで歩いて戻れば終了。

二・火打山(鍋倉谷支流惣兵衛落谷)  
スキー技術 中級、体力レベル 中、標高 差 一〇〇〇m、標準時間 登り四〜五時間、下り三〜四時間





火打山への夏道沿いに登山道入り口から黒沢に出合うまでシールで登る。道がわかりにくいので磁石で方向を確かめながら、時々出てくる赤テープを見落とさないように注意。

黒沢に掛かる橋からは 黒沢を沢沿いにつめる 夏道沿いに登る 橋の下流から黒沢の支流を富士見平へ上がる。の三つの行き方がある。 は雪が少ないと滝が出ていて通行できない。 はスキーをすべて担ぐことになる。 は途中までシールで行けるが、最後は急斜面をキックステップで登る。

富士見平からは黒沢岳の西をトラバースして行くと高谷池ヒュッテが見える。高谷池ヒュッテからは池を横切り、天狗の庭も横切つて火打山の肩へまっすぐ斜登行で上がっていく。肩からは少し急斜面となり、ジグザグにシールで登ればすぐに頂上に着く。頂上には雪は無い。

下りはスキーを担いで影火打のコルのほうへ稜線を少し降りる。夏道が出ている。コル

の手前で雪が出てくるとスキーを履き滑降開始。一旦影火打とのコルまで降りて、そこから真南へ滑り降りる。木がなくて斜面も広くて気持ちが良い。

標高一八五〇mまで滑ると右の惣兵エ落谷へ滑り込む。U字谷となっていて滑りやすい。途中で右からテブリが出ているが左岸を巻ける。鍋倉谷へ合流するところは雪が少ないと徒渉となることもあるが、よく探せばスノーブリッジがある。

合流地点からすぐに鍋倉谷の左岸の上の台地へ上がる。台地の上の林間を滑って行く。次第に傾斜が無くなり杉野沢橋からの林道の上へ出る。急斜面を少し下ると林道に出る。林道を辿って京大ヒュッテに戻る。

### 三・乙妻山

スキー技術 中・上級、体力レベル 中・上、標高差一二〇〇m、標準時間 登り六時間、下り四時間

連休前または連休中に笹ヶ峰ダムまで除雪されるので、車を使ってダムまで行く。ダムに駐車しスキーと荷物を担いでダムを対岸へ渡る。対岸の階段を登ると立派なブナ林が広がっている。

スキーをつけて平らなブナ林を南東へ進む。小さな沢をいくつも越えて一三六七mのピークの北のコルを目指す。このコルの位置は間違えやすいので注意して地図を読む。コルへの登りでは雪がつかないときもある。

コルからは一三六七mのピークから東へ派



生する尾根を回りこむようにトラバースする。このあたりもガスと間違いやすい。あまり東へ下りすぎると氷沢川のゴルジュ地帯となり行き詰る。うまく傾斜を取らずに尾根を右へ回りこんで南へ方向を変え氷沢川へ滑り降りると自然と林道に出る。

林道を氷沢川に沿って進むと道が二手に分かれる。右の上流に向かう道を上げる。ブナ林がとても綺麗な平原となっている。何本か沢を渡るので水を補給できる。林道からは遠くにこれから登る北東沢と乙妻山が見える。

林道を快調にスキーで進むと北東沢が全貌を見渡せるようになる。適当なところから林道はずれ北東沢へ入る。大変広い沢なので入り口はどこでもかまわない。枝沢がいくつもあるのでうまくルートを見つけたいと渡るのに苦労する。

次第に沢が急になるが沢幅は広く、木が少ないのでルートは自由に大きく取れる。シールで大きくジグザグを切つて登る。横ずれ防止にクローが有効だ。上部はとても急になる

のでシールで登るのが怖くなる。失敗すると数十m滑り落ちる。危険ではないが、意気消沈してしまう。

時間と体力に自信がある場合は、このあたりから乙妻山と高妻山のコルに向かつて上がって、コルから高妻山を往復してその後乙妻山に登ることも出来る。

乙妻山へ登る場合は北東沢を詰め、稜線直下のブッシュ帯が近づいたら、最後は右側の北北東へ派生している尾根へトラバースする。尾根を回りこんで乙妻山北斜面に出ると、頂上がすぐ上に見える。

慎重にシールを利かせて急斜面を登る。自信が無ければスキーは担いだ方がよい。頂上は丸い雪原となっていて遮るものが無く三六〇度山々が見渡せる。雨飾山、焼山、火打山、妙高山、黒姫山、高妻山、戸隠山、北アルプス。下りは頂上から滑り降りることが出来る。

登ったルートと同じところを滑る。最初は急斜面で緊張する。一旦北斜面を滑り、少し降りたところからトラバースして尾根を越えて北東沢へ入る。北東沢も出だしは急で緊張する。しかし斜面が広く木がないので自由な大きなターンが出来る。気持ちの良い連続ターンができるのと下から見上げると広大な雪面に綺麗なシユプールが描かれている。なお、雪崩れやすいので新雪が残っている場合は注意すること。雪崩の通り道を避ける。

急斜面が終わるとかん木が出てくるが自由にルートを取って滑ることが出来る。傾斜がなくなってきた沢の左前方へルートを取る。林道まで滑らずに左へトラバースしながら

ら出来るだけ氷沢川の下流までスキーを滑らせて行く。

最後は林道へ滑り込み林道を来たルートどおりに辿る。二手に分かれるので左を取り、林道の途中から夏道のとおりに二二九七m地点を目指す。林道から台地までの登りはシールをつけずに担いてもわずかである。台地は広く迷いやすい。コンパスやGPSを使って一三六七mピークの北のコルを目指す。

コルからは下の台地へ滑り降り、標高を落とさずに左へトラバースしダムを目指す。こも下り過ぎることがあるので、方向を定めて確かめながら滑る。ダムは最後まで見えないのでルート取りは注意が必要。

最後は坂をひと登りするとダムが見える。ダムまでの階段の横を滑り降りてスキーは終了。あとは車でヒュッテへ戻る。

(次号に続く)

## アムネマチンと黄河源流を訪ねて

中島 道郎

筆者は本年八月十二日から十五日まで中国青海省西寧市において開催された『第六回登山医学と高所環境生理学に関する世界会議』に参加したついでに、笹谷哲也会員主宰のアムネマチン・黄河源流探訪団に加わり、観光してきたのでその体験を報告する。

観光団は、AACK、笹谷哲也・松林公

蔵・田中昌二郎・高野昭吾・筆者、JAC京都支部、秋野子弦・上田潤三郎と高野の義兄武生盈の総勢八名。

この『世界会議』は、二年ごとに、ポリビアのラパス、ベルーのクスコ、日本の松本、チリーのアリカ、スペインのパロセロナと開催されて来たもので、今回は中国外から二十カ国百三十六名の参加があつた。

今回の当会議の西寧誘致には中国政府が積極的に動いているが、それには訳がある。現在蘭州からゴルムドまで伸びてきている青藏鉄道をもっとラサまで延長する工事が進行中であるが、この鉄道は場所により海拔四千米以上の高原を走る。工事人夫たちの多くは低地住民なので、現場に連れてこられると誰もが急性ないし亜急性高山病に罹り、当局はその対策に頭を痛めている。だから、世界一流の高所医学者を一堂に集め、彼らの知識を吸収しようとしたのである。

さて、我々の足取りを日記風に綴ると、

八月十一日…筆者と松林は西寧直行、青海賓館に投宿、十四日まで学会参加。あと六名の観光組は蘭州で笹谷ご雇員のガイド・喬海生と合流、楽都賓館に投宿。次いで、

十二日…白塔山から黄河を望む。旧石器時代の柳湾墓地遺構や彩陶博物館、瞿曇寺観光。西寧・青海賓館に到着。

十三日…さらに青海湖一周五三〇軒踏破を敢行。途中、文成公主の伝説に名高い日月山に立ち寄る。悪天候のため、景色はイマイチ。

十四日…観光組も会議主催のエキスカイションに参加。チベット仏教ゲルク派六大寺の一



つで一五六〇年創建になるタール寺に参詣。大勢の参詣者で駐車場にはバスが溢れ、まるで何かのお祭りか？と疑うほどの賑わい。近頃は農村部も暮らしに余裕が出てきたことをうかがわせた。

十五日…会議終了。以後八名一緒に行動。三台のバジエロに分乗して青海賓館を出発。まず、西寧北郊の岩山の断崖絶壁に穴を穿った道教の寺、北禅寺に参詣する。真直ぐな長い石段を登ると眺望絶佳。次いで町の西端に近い青海省博物館(日本の小嶋瞭次郎氏寄贈)見学後、いよいよアムネマチン探訪の旅に出発。南下してラジ山口(峠のこと。二六三〇米)を越え、黄河大橋を渡り、貴徳の温泉賓館に投宿。温泉といっても離れた泉源から引いてきた温泉プールで、水着着用とあり、興奮めして入らなかつたが、せめて施設だけでも見ておくべきであつた。町の中心に、玉皇閣という歴史的高層建築あり、その最上階からの眺望はまた素晴らしい。

十六日…左は草原、右は沙漠、その境目を南下、三七〇〇米級のいくつかの峠を越えて広い草原に出ると、旗を立てた百台以上のバイクの群が行列縦隊に並んでいるのに出会つた。何でもこのあたりの『活仏』様がお出でになるので出迎えているのだ、という。待つほどに、東からの道路を数台のクルマの列がやってきたかと思うと、猛スピードで我々を追い越していった。直ちにバイクの列が後を追う。我々もその群に混じつて前進すると、やがて草原に幔幕がしつらえてあり、大勢の老若男女が盛装して群れている。そこで何か

式典が執り行われるらしかつた。

このバイク、どれも皆ピカピカのマウンテンバイクで、四年前から爆発的に普及したという。ヤクの二頭も売れば一台買えるとかで、各戸数十頭のヤクを飼っているこの辺の住民にしてみれば、経済的には問題ないらしい。タール寺参詣といい、バイクといい、この辺境も確実に豊かになりつつあるようだ。

やがて道は川の兩岸が絶壁になつた景勝を通り抜け、しばらく行くと大きなラマ寺院があり、拉加寺という。中に入ると、丁度読経の時間で、ナン十人もの僧侶が本堂に集り、大声でお経を唱えながら一種の儀式を執り行なつてゐる。末席の小坊主たちは退屈してこつそりいたずらをしてゐるのが可愛らしい。その日はマーチン村の雪山賓館に投宿。

十七日…峠を三つ越えてアムネマチン氷河の近くまで遠足。アムネマチン峰(六二八二米)は最初の峠でもう遠望できる。日中事変当時中国側支援のアメリカ機操縦士が高度計を見誤つて、エヴェレストより高い山を発見したと報道したため有名になつた。雲南の梅里雪山と並ぶラマ教の聖山で、巡礼路が一周してゐる。青いケシの群生あり。再び雪山賓館泊。十八日…アムネマチンを南から西へ大きく迂回して約三百料、マータ村の『招待所』(政府役人や旅行者のために設けられた辺境の公共宿泊施設)に投宿。途中二・三回アムネマチンを遠望。最高峠は四五八五米、永久凍土地帯である。

十九日…流石は標高四二七二米のマータ村、朝起きてみると、八月だというのに猛吹雪で

積雪五センチ。吹雪の中を出発。黄河と揚子江の分水嶺バイエンハリ峠(四四一五米)まで往復。途中、星星湖など、大小さまざまな湖を見る。黄河源流域には無数の湖沼群がある。二十日…ここで笹谷と田中は六人と別れて、昨日のバイエンハリ峠を通つて四川省經由西蔵へ行く。残りは百料西のオリン湖へ。裏山に展望台あり、黄河源流探査の記念碑が建つ。付近には青いケシが咲いていた。湖畔にラマ寺あり。昔文成公主が吐蕃(チベット)王に嫁いだ時、王はここで公主(王女)を迎えた、と伝える。そこから、野生のロバやガゼル群れる草原を長駆四百料、午後十一時になつてやつと共和に到着。海南賓館に投宿。

二十一日…青海湖観光。この湖は、中国最大の湖で、広さは琵琶湖の六倍、湖面標高三千二百米の塩湖。十三日の悪天候とは打つて違って快晴となり、景色もがらりと変わる。背景の丘に登れば、眼下に文字通り『青い海』が広がる。湖中に鉄の建造物があり、魚雷実験場とある。道端に露天の蜂蜜・ローヤルゼリーの売場がずらりと並ぶ。自然保護のため禁漁区なのに、こつそりと魚は売られている。生活の保障なしの禁漁は無理なのだ。次いで再び日月山。快晴で週末とあつて、おびただしい観光客。みやげ物の押し売りが激しい。ここは、十七歳の文成公主が望郷の念をきつぱりと断ち切つて入蔵したという伝説の場所として有名。彼女は大勢の技術者・芸術家・学者を引き連れて西蔵王に嫁入りし、かの国の文化水準を高めたので、それ以後、西蔵から中国への侵略はやんだ。わが身を犠牲にし

て中国を救った偉大なるお姫様、として彼女は中国民衆の間ではやたら人気が高い。

日月山からは中央分離帯付本格的『EXPRESSWAY（英語）』が出来ていて、一時間足らずで西寧に帰り着いた。

終り

## 大日岳遭難「事故」は「事件」 研究会へ

荻野和彦・岩坪五郎

北アルプス大日岳山頂付近で二〇〇〇年三月五日に雪庇崩落事故が発生してから、早くも四年八ヶ月が経過した。この事故が事件に発展して、社会的に大きな反響を呼んだことは会員各位の記憶に新しいところだと思つた。富山地検に書類送検され、業務上過失致死の疑いをもたれていた山本一夫、高村真司両君に対して、去る六月九日、嫌疑不十分により不起訴の処分が出された。遺族はこの決定に対して検察審査会への不服申し立てはしない旨、七月三十一日記者会見の席で表明した。理論的にはともかく、実質的には大日岳遭難事件の刑事事件はひとつの区切りを迎えたことになる。

これまで、事件は捜査中であるということ、内容に立ち入った議論は避けるべきだとしてきたが、このあたりで事故が事件になった経緯を振り返り、事故と事件の真相を明らか

かにしておくことが必要なことであると感じているのは筆者らばかりではない。山本一夫・高村真司両君を支援するためにいち早く立ちあがった、日本山岳会京都支部では大日岳遭難「事件」研究会を開設して、真相を明らかにしようとしている。このことを会員各位にお伝えし、積極的なご参加をお願いしたい。呼びかけ人代表者はAACK会員斎藤惇生氏である。

「事件」研究会の活動計画のあらまし

大日岳遭難事件は、大日岳山頂付近で二〇〇〇年三月五日に発生した雪庇崩落事故によって文部（当時）省登山研修所主催の大学山岳部リーダー冬山研修会の研修生内藤三恭司、溝上国秀両君が死亡するという山岳事故に端を発している。山本君はこの研修会の主任講師として、高村君は亡くなったふたりの班の担当講師として現場に居合わせた。そのことによって両君は刑事責任を問われることになった。遺族は国に損害賠償を求めて民事訴訟を提起した。山岳事故が法律を楯にとつて争う社会事件に発展した。大日岳で生じた山岳遭難は事故と事件というふたつの側面、相をもつことになった。法律に関わる側面を仮に事件と呼ぶとすれば、事故発生メカニズムにかかわる側面は事故相と言うことができよう。

積雪に伴う雪庇の形成や崩壊、雪崩の発生などは自然現象である。そこへ人が接近するから事故になる。更に事故に関わった人の間に葛藤が生まれ、軋轢が生じることによって、

自然現象は社会問題に変貌することになる。事故と事件、自然現象と社会問題というひとつの現象のふたつの側面、事故相と事件相は一般には混乱した受け止め方をされている。時には故意に両者を混同させようとする言動さえ見られる。

山本君は「ふたりの若者が亡くなった事故の責任は自分にある」といい続けている。この発言に共感を覚えたものは少なくないはずだ。にもかかわらず、この発言を聞いた人のなかには事件の責任を両君にとらせようとした。講師たちは「ふたりの若者が亡くなっているのだ、責任を感じないのか」と警察官に畳みかけられて、「それ見ろ、責任があるではないか」と追い討ちをかけられた。明らかに事相のすり替えである。意図的なすり替えといつてもよい。そんなことがまかり通るのは不条理というものではないか。事故と事件をしっかりと見極めて、それぞれを掘り下げておく必要があるというのが大日岳事件研究会を発足させるいちばんの理由である。

一、研究会では「事件」で問われたものは何かを考察する

大日岳事件の法律に関わる諸相を明らかにすることがまず、最初に手をつける課題である。今回の事件は登山中のあらゆる行動が法律に抵触するおそれがあることを如実に示した。山岳事故の責任がどのような法律に問われるのか。

刑事訴追に関連する側面について

・業務上過失致死罪とはどういうものか

・山岳事故がなぜ業務上過失致死罪に問われるのか

山岳事故と法律の関係全般について

・山岳事故の法的責任とはなにか

・山岳事故の法的責任をとるためには、何をしなければならぬのか

をまず明らかにする。弁護人として活躍された三野岳彦、武田信裕両弁護士に、今回の事件の法的側面、警察、検察による取調の実態について詳しい解説を期待している。

二、「事故」が発生したメカニズムを考察する  
 事故発生メカニズムについては文部(当時)省が依頼した事故調査委員会が分析したその結果、当時の積雪状態、雪庇の形状、その崩壊について当時の雪氷学の知見では事故は予見できなかったとした。知らなかったから責任はないと突き放しただけでは雪氷学にも、登山文化にも未来はない。何が分かってなかったのか、何を知らねばならないのか、科学者として、登山者としてもういちど根源的な問いを発する必要がある。

積雪地形の気象学、雪氷学、地形学的な調査研究

この事故は雪庇が崩落したことに端を発している。「雪庇崩落」という言葉から、ひとびとは軒先に突き出る庇状の積雪、雪庇が崩れたと受け取りがちであるが、大日岳付近の積雪は通常の「雪庇」ではない。山頂に形成された巨大な積雪ドームである。付近の山稜には延々と雪堤が連なっている。雪氷学会が雪庇の定義を見直し始めたという。

今回の事故発生を予見する上で当時の雪崩発生理論、雪崩回避のための行動はほとんど役に立たなかった。大日岳における積雪が局地的な気象、地形の中でどのように積雪地形を発達させるのか。事故発生後、講師たちが掘り出したトレンチによって、大日岳の積雪規模がとんでもない大きさに発達することが示された。日本の積雪地形の形成、発達そして崩壊過程を検証可能な形で明らかにしなければならぬ。できれば大日岳付近で最大積雪時の断面を観察、調査し、積雪ドームの強度を推定するという実証的な調査を行う。

ルートフ  
 アインデ  
 イングに  
 おけるG  
 PSの活  
 用  
 雪庇崩落  
 の危険が予

想されるところに人が近づくから山岳遭難の危険が生ずる。遭難の危険を回避する努力を怠ってはならないにしても、大日岳のように積雪地形形成に伴う巨大な積雪ドームの発達するところではどこをルートに取るべきか、きわめて精密な考察が求められる。どんなに経験の豊かな登山者でも地形図とコンパス、高度計だけでは上述のルートファイディング

年月日	大日岳事件研究会日程(予定)		
	事件相の研究	事故相の研究	
	法的側面の研究	積雪地形研究	GPS研究
2004/10/22,23			越後駒ヶ岳：荻野
2004/10/24		積雪地形研究会、富山カルデラ砂防博 ・総括：岩坪 ・雪氷学：横山、川田、飯田 ・ロジスティクス：山本	
2004/10/27	岩坪五郎、荻野和彦、杉山イタル：大日岳事件の経過と顛末、京大会館 #102		
2004/11/27,28?			未定
2004/12/15/19:00	三野岳彦：大日岳事故はなぜ業務上過失罪に問われたか？京大会館 #102		
2004/12/25,26			三田原山？
2005/01/26/19:00	武田信裕：山岳事故の法的責任？京大会館 #102?		
2005/01/29,30?			未定
2005/02/17?			研究会未定
2005/02/25,26?			未定
		秋田谷英次：大日岳の雪庇？	
2005/03/26,27?			未定
2005/04/15-25 頃		大日岳山頂付近の雪庇現地調査	
2005/05 以降	成果のとりまとめと公刊、論文作成		

グに耐えられる位置精度を得ることはできない。

近年、GPSを用いた位置決めが登山のルートファインディングに有効であるといわれているし、GPSを適切に運用すれば、山の中でも数メートルの精度で現在地を決めることが可能になってきた。登山、特に大日岳のような積雪地形の発達するところで積雪期に適切なルートファインディングをするためにGPS技術を習得することは不可欠になると考えられる。しかし、またGPSは万能ではない。谷底、樹林下、雨天のときなど衛星データを受信できなくなることがしばしばある。GPSの限界を知悉した上で適切な活用法を早急に確立しなければならぬ。登山に役立つGPS活用法を考案する。

### 三、研究成果を公表する

以上大日岳遭難事件に関する法律的な検討、事故発生メカニズム解明につながる大日岳における積雪地形の形成に関する研究、危険回避の手段としてのGPS活用の実用例の集積などを成果として取りまとめ、公表しておくことが必要である。公表の仕方は印刷物、講演会、電子メディアなど工夫する余地がある。さまざま手法を駆使して、積雪期の山岳事故を少なくする努力に少しでも寄与することができれば幸いである。

\*十一月一日現在の大日岳事件研究会開催日程案は十八頁の通りである。研究会はいずれも京大大会館で午後七時開始の予定であるが、詳細については

岩坪 e-mail: goro@ceres.ocn.ne.jp, 075-561-0821 または 荻野 e-mail: rxw00766 @nifty.com, 090-5129-7586宛にメール  
または電話で問い合わせ確認していただきたい。

## 東チベット最深部・怒江源流域から雲南の旅

田中昌二郎

日程 二〇〇四年八月二〇日から九月三日  
メンバー 笹谷哲也、田中昌二郎

「アムネマチンと黄河源流を訪ねる旅」で青海省最奥部まで行くのだから、そこからチベットへ入り雲南へ抜けて、梅里雪山にお参りに行きませんかと、笹谷さんから誘いを受けた。甘肅省蘭州から雲南省中甸まで。地図を眺めて武者震いした。

それならもう少し足を延ばして、茶馬古道の故地、未踏の六〇〇〇峰が屹立する怒江（サルウィン川）源流地帯に入れないものか。笹谷氏に打診をお願いし、ガイドの郭さんから許可申請をしてもらったところ、案ずるより産むが易く許可が得られた。日本山岳会監事であり、横断山脈研究会会長である中村保氏の長年にわたる踏査報告を読ませていただき、特にこの地帯「川蔵北路と南路の間」を何とか訪ねたいと思っていたところであっ

た。ただし道路事情がどうなるか、これは天気次第と覚悟をしての出発となった。

八月二〇日 瑪多（マトウ）からジヨクンド・玉樹（ユイシュ）へ。

笹谷と田中は、瑪多にて中島道郎氏ら「アムネマチンと黄河源流を訪ねる旅」一行と別れ、国道二一四号を南下する。ガイドは笹谷さん馴染みのカンパ族青年郭健文さん、運転手はベテランの江楚（ジャンツォー）さん。バヤンカラ山口・標高四六一五m 雁口山峠・四二九〇m 通天河（金沙河上流）を渡る 新塞瑪尼城（寺）にてマニ石（一つ五元）を奉納し、行路安全を祈る 玉樹県の結古鎮着・標高三五七五m、玉樹賓館泊。

なお参考までに、SUUNTO社のVECTORで測った高度を記述しましたが、気圧変化などの補正は一切行っていない事をお断りいたしておきます。

八月二一日 玉樹から囊謙（ナンチェン）へ。通常、東チベット最大の町昌都（チャムド）へは、一旦四川省に入り石渠（セルシュ）を経由して国道三一七号（川蔵北路）に出、徳格（デルゲ）経由で入る。今回は郭さんの情報により、このまま国道二一四号を南下し、囊謙（ナンチェン）、類烏齊（リュウオチエ）経由のルート（後半はかなりの悪路とのことだが）を採ることとした。結古寺参拝 市内中心部広場は、冬虫夏草や薬草の取引に来た人達、札束を懐にした仲買人とバイクが溢れ、仏像の闇取引人を誘うものもいる 文生公主廟参拝 ガラカ山口・四三二〇m 四一七〇mの峠 扎曲（ザチュ）を渡り 囊謙・三五

五五mに到着。赤茶けた街路をバイクが走りまわっている。招待所泊、シャワーはないが清潔なり。

八月二二日 囊謙から昌都へ。

今日の行程を考え八時半に出発。ジャンタヤカラ・四一三五m ウヤラ・四三一〇m シャガラ・四三〇〇m 新設された自動車道はよく整備されていて快適、岩山と峡谷美、絶景なり。パジェロ一台分の幅しかないチーツーカー峡谷通過 昂曲(アンチュ)上流部を渡り、チベット自治区入ると事情は一変し、悪路の洗礼をうけての初入蔵となる。吉多郷 赤褐色の大岩壁の峡谷を通る。あたかも黒部川下の廊下をランクルで走っているように 峠・四二二〇m 類烏齊(リウオチエ)ツクラカンゴンパは、ほぼ修復を終え威容を見せていたが、泥濘の中で、門前町となるべき二二三〇軒が一斉に新築工事中であった。資金は何処から出ているのか?悪路の登り下りを終え、街路のよろず雑貨屋にて昼食、二年ぶりのバター茶が美味い。雑貨屋の品揃えはyakubataの計り売りから、自転車・バイクのギヤーやアルミホイール。ビール、化粧品、LXXの石鹸まである。 類烏齊鎮・三七〇〇m 川蔵北路(国道三二七号)に入り素晴らしい針葉樹林帯を見る 峠・四四二〇m 一二時間半の辛い旅を終え、午後九時に昌都(チャムド)・三一七五m着。昌都賓館泊。八月二三日 昌都滞在。

午前中は休養にあて、下着の洗濯の後、町をぶらつく。赤褐色の濁流、扎曲(ザチュウ)と昂曲(アンチュウ)の合流点の町昌都は、

想像を超えて商店、食堂が軒を並べ、中国電信の近代的オフィスもある大都会である。しかし、チベット人の商店街と漢族のそれは分かれてる。

八月二四日 いよいよ核心部、昌都から怒江を越えて洛隆(ロロン)へ。

昌都の高台に聳える強巴林寺(チャムバリン・ゴンパ)参拝 扎曲・昂曲の二川が合流した瀾滄江(ランサンジャン)沿いに下る。メコン川の上流部に始めてまみえ、狭い川幅を渦巻いて流れる迫力に圧倒される。急峻な岩稜の峠・三三六〇mを越え、瀾滄江の支流・色曲を渡る 浪拉山峠・四三二五m 昌都空港まで一八キロmの地点で舗装の国道二一四号と別れ、標高四〇〇〇mを越える草原につけられた公路三〇三号を西行、洛隆(ロロン)を目指す。莫拉坡(モラポ)・四五五〇mから急な下降 吾水郷・三八三五m 峠・四一三五m 馬利郷からまた急な登り 峠・四一四〇mを越えると怒江の大渓谷が姿をあらわす。怒江は青味がかった鉛色をしていて、凄みを感じる。切り立った断崖に延々と刻まれた一車線幅道路の路肩は砂礫で、崩れ易そう。驟雨が襲う。対向車が来ないことをただ祈った。雨雲を裂いて陽がさすと、車の下の峡谷に虹が架かる。加玉橋・標高三〇九五mにて右岸へ渡る。一気に約一〇〇〇mを下ったことになる。少し上流に流れ込む支流のゴルジュ(川幅は三mもない)の中に、岩の支尾根を切り開いてつけられた道を登ると、一転して広々と開けた康紗(カンチャ)郷・三七七〇mに出る。青麦(チンコー)の

収穫時期にあたり、黄色く色づく畑のPATCHワークが美しい。広々とした大高原の峠・四二七〇mを下り、洛隆・三五一〇mに午後八時着。約十一時間四〇分のタフな旅を終え、着いた招待所は満員。しかも服務員から、窓を破って盗みに入ってくる心配があるので、窓際には荷物を置かないようにとの注意にたじろぐ。物騒なところだ。そういえば街路にたむろしていた人たちの暗い表情が気になる。

八月二五日 洛隆から新辺坎(ベンバル)へ。うなされたりしてよく眠れずに朝を迎えた。招待所前の小吃(食堂)にて朝食をとりながら、郭さんは、トラックの運転手から情報収集する。出水のため長期間道路が不通であったが、約一週間前に復旧した由、誠にラッキー。加油に時間がかかり、九時出発、峠・四二六〇m 中亦郷(チュウイーシャ)・三六五五mでも、収穫した青麦を馬に山盛り背負わせ、屋根が隠れるほどに家の周りの稲木に架けている 巴里郎(パリラン)・四〇二〇m 峠・四五八〇mにて南西に雪山が見える。旧ソ連製二〇万分の一地図記載の五八二二、五五九七、五八二八峰が拉孜(ラツァ)・四〇〇〇m 怒江支流の岩稜の分水嶺を四三〇五m地点で越し一旦三九六〇m地点でダム・ドル谷へ入り、本流へ戻る。出会橋三九〇〇m 旧辺坎(ベンバル)・三八九〇m 左岸に氷河の懸かった岩峰は、五九四〇mのドンブノ峰か。探訪は明日にし、新辺坎へ急ぐ。屈曲点・草卡(ツォツカ)の南に広がる谷の奥に三角錐の峰が望

める。五九八〇m峰か。新辺坑は標高三五〇〇m、こんな奥地でも全国共通の四角いコンクリート造り店舗が道の両側に新築されており、新築一流ホテル並みの中国電信援建、辺坑県綜合文化中心に泊る。これも西部大開発の一環か？驚嘆しながら部屋の洗面所を見ると、プラスチックの水溜めと手桶があり、案の定、水道の蛇口から水は出ない。

八月二六日 新辺坑から戻り、普玉谷、ダム・ドル谷探訪。

普玉谷出会橋へ戻り、よく整備された二車線道を左岸岩壁沿いに快適に遡行、二〇〇二年四月の中村保氏のキャンブ跡を越え、右股に未踏、未踏査のコナ 峰・六三七八m、峰・六三三四mなど、怒江とヤルン・ツァンポーの支流易貢蔵布（イゴンザップ）との分水嶺に屹立する連峰の豪華な絵巻を見る。左股主峰・コング峰の鋭いナイフリッジは辛うじて覗けたが、頂上部は残念ながら雲の中。案内願った普玉村のアチュン氏（四二歳）に現地情報を聞く。コナ、峰は全体で「ルソングム」と言い、各峰に観音菩薩などチベット仏教の菩薩名が付けられており、郭さんの通訳で聞き取った。また、解放軍兵士が軍装をつけて、普玉の谷を南へ、易貢蔵布側へ越えた事があるとも云う。その後、昌都賓館の案内パンフレットに記載があった三色湖にも案内してもらった。文革で破壊されたゴンパの麓に、一つは透明な緑色、一つは九寨溝のように透明な青色の水をたたえ、神秘的であった。次の目的地ダム・ドル谷へ先を急ぎ、もう一つの湖を見学しなかったのは今

となつては心残りである。旧辺坑經由、ダム・ドル谷へ入り、バジェロで十数回渡渉して、四〇九〇mの台地まで車ですすむ。徒歩でモレーンを登り、四一五〇m地点で二つの氷河湖を望むが、谷の奥に聳えているはずのゴゴン 峰（六二五二m）やチュンジュンツオ峰（六二〇四m）などは、濃いガスのペールに包まれたままである。未踏峰の宝庫に入りながら残念だが、新辺坑綜合文化中心に戻る。

八月二七日 新辺坑から怒江脱出。

ベテランドライバーの江楚さんも怒江越えにはナーバスになっている。雨の降らないうちに帰途に付く。川蔵北路への道路は、まだ水害復旧工事中と聞いたが、那曲県所属のトラック二台と行き交う。洛隆で加油し先を急ぐ。怒江を渡り、今度は目もくらむ断崖の登坂。パンク修理中のトラックと行きあつたが、無事離合。午後八時一五分、とつぶり日も暮れて、往路昼食を採った布学沟（プーシユエク）・三八七〇mの食堂兼旅館に泊まる。怒江を無事通過でき、ギシギシときしむ寝台も気にならない。

八月二八日 旅館から芒康。

莫拉坂 国道二一四号に戻る。舗装道路のなんと快適なことか！ 中国一高所の空港、昌都空港（標高四一七〇m）の横を通る。成都や拉萨などと結んでいるが、小さな食堂のような管制塔があるのみで、ここに着陸するのは勇氣がいる。邦達 玉曲に沿い川蔵南路を下る 左貢・三六七五m 東達拉・四八六五mにて動日翼波（ドウンリガルボ）連山・

六〇九〇m、六三二四m（勿論未踏）を遠望再びランサンジャンを二六七〇mで渡る 峠・四二〇五m 四二二五m 芒康・三七五五m、康盛賓館泊

八月二九日 芒康からランサンジャン河畔の曲孔卡温泉まで半日行程。

ホンランシャン・四〇四五m 瀾滄江の絶壁崩落地帯に大吊橋を架ける工事のため、上り下り交互時間通行。開門と同時にダッシュを掛けて、泥濘の道にスタックするトラックやランクルを抜き去る。三八七五mの峠下に広がる広葉樹林の中に、松茸採取村がある。開いた松茸は五〇〇g一五元、上質のドンコは九〇元。一五元のものを買ひ込む。ランサンジャンにかかった吊橋を渡り、曲孔卡温泉・二二八五m、蔵家楽館泊。夕食は笹谷氏が料理人を指導し、鳥一匹を丸ごと使った松茸の水煮、松茸とチベット唐辛子の炒め物などの特別料理付き。スープも薄味に出来て好吃（ハオチー・うまい）。乳白食の温泉は温めながら泉質も良く、高度も下がったこともあり、疲れがとれる。

八月三〇日 曲孔卡温泉から明永村。

仏山 塩井（塩田がランサンジャンの両岸に見える） 雲南省境・二二〇五m 明永村へは完璧な舗装道路を下ると梅里雪山景区ゲイトがあり、景区入山料六三元（保険料三元を含む）を徴収している。去年は一二〇数万円の収入があつたが、今年は減収とのこと。明永村・二二六五mには民宿、食堂が立ち並び、民宿・若布桑牧客棧に泊る。チャシ村長と宿の主人を迎え会食。

八月三十一日 明永村から徳欽。

騎乗して針葉樹林帯の中を明永氷河へ登る。乗馬料(明永村)白馬寺往復)八五元、要予約。村民の大切な収入源であり、一家総出で稼いでいる。太子廟参拝、灯明をあげる。氷河沿いに架けられた、ナイヤガラ瀑布見物橋のような立派な橋を登り、明永氷河を望む展望台にて黙禱し下山。帰途、村外れから振り返ると梅里雪山の頂が一瞬間を覗かず。飛来寺・追悼碑 徳欽着。ガイドの郭さんの自宅にお邪魔し、電熱で焼松茸をする。彩虹大酒店泊

九月一日 徳欽から中旬(香格里拉・シャングリラ)。

パーマー雪山・四一六〇m 峠・四二二〇m 四〇〇〇m 中山茂樹会員とJACナムチャバルワ隊の通訳をされた梶田氏と行き違う沙納柏海・三一〇〇m 中旬(香格里拉・シャングリラ)、天界大酒店泊

九月二日 中旬 昆明、昆明 北京、北京泊  
九月三日 北京 関空帰着。

蘭州から青海湖一周し、アムネマチン山麓をまわり、怒江上流域を往復して雲南省中旬まで全行程約四八〇〇Km、高度四〇〇〇m以上の峠を二九力所越える車の旅だった。普玉谷やダム・ドル谷はほんの少し覗いたにすぎないが、それでも魅力一杯のフィールドと感ずる。未踏査、未踏の六〇〇〇m峰が数多屹立しており、氷河に登路を探り頂上を極めるのもよし、川蔵南路への峠を越え、易貢蔵布の谷を探る旅も楽しい事だろう。また川蔵

北路への道も面白いだろう。道路事情も中村保氏が入られたときと比べ改善されているし、入域許可も用意に取得できる。むしろ急がないと西部大開発により、あつというまに観光地になってしまいかも知れない。中旬で笹谷氏が見つけた「中国地理」CHINESE NATIONAL GEOGRAPHY(2004年)川蔵・大香格里拉特集には、横断山脈奥地の空港建設計画図が掲載されていた。新都橋、理塘、稻城、徳欽、石渠、玉樹、然烏、墨脱、林芝、果てはあの新辺坂まで建設予定地に入っている。あの立派なホテル・新辺坂県綜合文化中心も、計画の線上にあるのかもしれない。また、北京でもとめた道路地図では、既に川蔵北路と南路が新辺坂で結ばれている。新疆ウイグル自治区のオアシスが、航空路で結ばれ、タクラマカン砂漠縦断の高速道路・砂漠公路が出来ているように、案外早く新辺坂に飛行機が降りて来るかもしれない。あまり時間は残されていないように思う。

## ヤルン・カンのサーダー・カルマ、四年おくれの訃報

上田 豊

一九七三年の学士山岳会ヤルン・カン隊サーダーで、一九六四年山岳部アンナプルナ南峰隊にも参加したカルマ・シエルバ氏が、四年前、六四才で病死されていたことを、この

秋ネパールで聞きました。ヤルン・カン以降も交流がありながら、四年も経ってから知るとはと、やるせない思いです。

一九七〇年代後半は、氷河調査でネパールを訪れた際、カトマンズのチャーベルにある彼の家を数回たずねることができました。会ったこともないわたしの妻にと、チベットの服を仕立ててくれたこともありました。その頃、ポドナートにシエルバのゴンパを建立するため募金の協力を依頼されたのに、ほとんど役立てなかったのは、つらい思い出です。一九八五年頃からは、ご夫婦でクンプ氷河のロブチェでロツジを営み、一九九五年十一月の豪雪・雪崩で日本人トレッカーも多数亡くなられた際に居た、氷河調査隊の若いメンバー達がお世話になったことがあります。その時、わたしへのみやげにと、Tシャツをメンバーに託してくれました。

ただ、彼がロブチェに居た頃は、わたしはクンプ地方には行けず、去年もチャーベルの家をさがしたが、建築ラッシュで付近の様子が一変しており分からずじまい。結局かれに最後に会えたのは、一九八二年の昔にさかのぼることになるうとは。それはアンナプルナ連峰の北をマルシャンディ川からカリガンダキへ抜け、トゥクチェを出た日のこと。アンナプルナ南峰を登山以来一八年ぶりに地上から見る事ができた直後でした。道端の石垣の陰にガイドが数人おり、ふと知っているシエルバが居ないかと思つてわざわざのぞき込んだら、彼が居ました。さっそくチャンをおごつてくれ、ふたりでポリバケツ一杯分を飲



み干しました。

十年程まえ、老体にロフチエ暮らしはきついで、親族でトレッキング会社を始めるといふ手紙をもらいました。いまもロフチエでは、長男夫婦が“Above the Cloud Lodge”をやっており、今回わたしが泊まった際は、長男夫人（北陸各地のスキー場を経験し、日本語上手）がロッジを切り盛りしていました。長野県のスキー場で働いていたこともある長男サムデンは、左記のようにカトマンズでトレッキング会社を営んでいます。

Samden Sherpa, Managing Director  
Snow Waves Mountain Trekking (P) Ltd.  
P.O.Box 21663, Kathmandu, Nepal

Tel: 977-1-4700802, Fax: 977-1-4371864

E-mail: snowwaves@vianet.com.np

Web: <http://www.snowmount.com/>

カルマ夫人は、建て替えたチャールベルの家で元気に暮らしておられるようです。二男一女と六人の孫も皆さん元気で、次男Dorjee夫妻はいま滞米中とのこと。

カルマの山歴は次のとおりです。

(報告書「ヤルン・カン」より)

1956 ヒマルチユリ (JAC)

1959 ダウラギリ (JAC)

1962 ジャヌー (フランス)

1964 ギャチュンカン (長野岳連)

アンナプルナ南峰 (京大)

1965 ローツェ・シヤール (早大)

カンパチェン (ユーゴ)

1969 アンナプルナ (西ドイツ)

1970 マカルー (JAC東海)

1971 パウダ (愛知大)

1972 アンナプルナ (JAC信濃)

1973 ヤルン・カン (京大)

最後に、かれとの文通で印象に残る言葉をしるしておきます。(息子さんが英語に直した手紙を和訳しました。)

1993.11.21

「わたしは、我々が共に過ごした日々をよく思い出す。実にそれは忘れられない日々だった。その後どうしている、皆さん元気にしているか?」(この返事で、ヤルン・カン隊員の半数以上がすでに亡くなったことを知らせた。次は、それに続く手紙の一文。)

1994.2.6

「わたしが若い頃、クライミング・シェルパとして働いていた際、自分自身いくつかのひどい事故を生き延びてきた。それはわたしを悟らせることになった。我々がこよなく大切に想う山々にとっては、我々の命がいかにとるに足らないものか。」

## 事務局報告

(仮称) AACK海外登山・探検助成制度の立ち上げ

十月四日に会員・阪本公二様からAACK会長、副会長宛に提案がございました。一九九六年の第三次梅里雪山隊を最後にAACKが会として国内・国外の登山を企画・実行することが途絶えているので、会員が個人的に

企画する海外登山に対して会から助成金を交付することで会員の年会費を有効活用し、会員の登山活動を促進して会の活性化を図るべく海外登山助成金制度を提案するという主旨のご意見をいただきました。

理事会メンバーでこの提案について意見交換し、その実現に向けて検討を進めることにいたしました。

(仮称) AACK海外登山・探検助成制度と呼んで、新しい制度として事業化する予定です。申請方法、助成対象の基準と採択の手続きを明確にし、制度を全会員にお知らせする予定です。財源は一般会計を充てますが、予算にあまり余裕がないので、収支の見通しを考えて年間の助成額は三十万円程度になると思われまます。また、公益法人が行う助成制度が満たしておくべき要件があるのか、制度を事業化するにあたり調査しています。

できるだけご要望に早くお応えできるよう努め、制度の方針と運用規定などを理事会で決め、事業計画に盛り込んで予算化した後、次年度から運用できることを目標に検討を進めていることを、会員の皆様にご連絡いたします。

AACK事務局長 吹田啓一郎

## 荣誉

松沢哲郎会員が紫綬褒章を受章

本年度秋の叙勲が発表になり、本会松沢哲

郎会員が紫綬褒章を受章されました。  
おめでとうございます。ここにお祝いを  
申し上げ、お知らせいたします。

## 訂正

二頁 スレーター前号(No.32号)に校正ミ  
スが多数ありました。お詫びして訂正いたし  
ます。

一頁 中段本文十一行目

誤 一九六八年 正 一九五八年

同十四行目

誤 隊長 正 副隊長

二頁 写真説明五行目

誤 としてに 正 として

四頁 後から四行目

誤 呪縛かみずから 正 呪縛からみずから

下段一行目

誤 向けてむけられて 正 向けられて

六頁 中段十三行目

誤 高み達した 正 高みに達した

## 編集後記

AACK関東在住会員有志が、十一月四日、  
雲南フォーラム(仮名)と言つ会を立ち上げ  
られたと聞きます。松林会員には、「梅里再

訪」の熱い思いを執筆頂きました。東西に時  
を同じくして胎動を感じます。

平井会員の「AACK人物抄」次号は、伊  
藤ゲンさんを予定して頂いているとのことだ  
す。ご期待下さい。

本多会員からはマライーニさんを偲び、氏  
撮影の写真と共にご寄稿いただきました。  
有難うございました。

横山会員には、中越地震後の対応の中心と  
して大変ご多忙な中、執筆いただきました。  
氏が長年にわたり地道に蓄積された積雪量調  
査データを活かし、同地方の安全に活躍さ  
れます事をお祈りいたします。

「五月連休にヒュッテからワンデイで楽し  
める山スキーコース」後半を、紙幅の関係か  
らやむを得ず次号に掲載せざるをえなくな  
りましたことを、お詫びいたします。上級者必  
見の天狗原・金山、焼山の詳しい案内をこ期  
待ください。

学生時代、エベレストは登頂されてしまっ  
たが、まだ九〇〇〇mのアムネマチンがある  
さ、と慰められた懐かしい山を巡る旅を執筆  
いただきました。有難うございます。

荻野、岩坪会員の大日岳事件研究に賛意を  
表します。登山と法律、地勢学、雪氷学など  
の領域に深く切り込み、従来、十分に研究さ  
れなかつた部分に光を当てられ、得られた新  
しい知見を、登山界に広く知らせていただ  
く事を期待します。

次号No.33の原稿締切日は二月一〇日、発  
行は三月中旬を予定しております。山行記録  
旅行記、論評、エッセイなど分野を問いませ

ん。気軽に「ご寄稿くださいますようお願いいた  
します。」  
(田中)

編集委員

田中昌二郎

発行日

二〇〇四年十二月末日

発行所

京都大学学士山岳会

〒六二〇〇二一 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作

京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所